SHIBETSU ROTARY CLUB DISTRICT 2500 JAPAN

士別ロータリークラブ会報

創立 1960･3･24 RI第 2500 地区

Vol. 15 No. 2832

2023ー2024年度国際ロータリーのテーマ

2023-2024年度ＲＩ会長 ゴードンR.マッキナリー

世界に希望を生み出そう

2023-2024年度ＲＩ第2500地区テーマ

ガバナー鶴見誠一郎

今こそ変わる勇気を！さぁ、一歩前へ

2023ー2024年度士別ロータリ-スローガン

【勇気ある行動で友情と奉仕の実践へ】

～ Let's bigin ～

■会　長／菊地　昭通
■副会長／山下　卓己
■幹　事／福島　和秀
■例会場／士別グランドホテル
■例会日／毎週月曜日　12:10～13:00

2500地区ホームページ　http://rid2500.jp/

士別ＲＣ　http://www.douhoku.jp/sibeturc/

ＲＩホームページ　https://www.rotary.org

第2921回例会 2023年 11月 6日

今日のプログラム　・普通例会・誕生祝・理事会

前回（10月30日）の記録　・夜間例会

司　　　会　志村孝幸　会場監督
斉　　　唱　それでこそロータリー
本日の出席　会員 43人中　出席者 43人　出席率 100%
本日の欠席

メークアップ
ビジター
ゲスト

ニコニコBOX

累計　199,000円

例会予定

■ 11月例会日［ロータリー財団月間］

● 11月　6日（月）　普通例会・理事会
● 11月　13日（月）　普通例会
● 11月　20日（月）　普通例会
● 11月　27日（月）　夜間例会

■ 12月例会日［家族月間］

● 12月　4日（月）　普通例会・理事会
● 12月　11日（月）　夜間例会・ファミリーパーティ
● 12月　18日（月）　普通例会
● 12月　25日（月）　特別休会

■会務報告…………………菊地　昭通会長

本日は、冤罪と死刑囚についてお話しいたします。
今年1月に亡くなった作家の加賀乙彦さんは、精神科医でもあり東京拘置所医務部で勤務した際、40人以上の死刑囚と面接をしてきました。
死刑の執行がいつかわからない恐怖におびえる者、死を受け入れる者などさまざまな死刑囚と向き合っていました。
人間への深い洞察を作品に織り込んだ根室出身の死刑囚を描いた長編小説「湿原」もそうです。
中年の主人公は爆破事件の犯人に仕立てられたが冤罪であり、共犯とされた恋人と無罪を勝ち取り道東の湿原で新たな人生へと踏み出す物語は感動的でした。
つらい場面が多い一審判決を耳にすると、死刑という言葉は細身の剣となって私の心臓を突き刺し血を流させ、やっとの思いで法廷に立ち、長く獄中にあり精神を病んだ別の被告も登場しました。
幻覚に苦しむ様子はあまりにもむごくて、まさしく拘禁反応であった。
やり直し裁判が先日始まった袴田 巌さんの苦しみも同じではなかったのではないか。
強盗殺人容疑などで逮捕されてから57年。
死刑確定から30年以上の歳月を獄中で過ごされ、死が常に目の前にちらつく過酷な生活を強いられ頑健な元ボクサーは意思疎通すら難しい状態に追いやられてしまいました。
87歳の弟に代わって初公判に臨んだ姉のひで子さんはこう述べられました。
「どうぞ、巌に真の自由をお与えくださいますようお願いします。」と無罪を願う90歳の言葉は非常に重く、「湿原」の主人公とは違い、残された時間は限られており迅速な裁判を強く望みたいものです。

■幹事報告………………… 福島　和秀 幹事

1. 士別スロヴァキア国立オペラ実行委員会からお礼状が届いています。又、シンガポール全国大会の案内が届いております。閲覧ファイルに閉じておきますのでご確認ください。
2. 士別市より「北海道警音楽隊コンサート2023in しべつ」の案内が届いております。11月19日12:30開場　13:30より開始となっています。ご希望の方は参加可能となっておりますのでよろしくお願いいたします。
3. 次回11月６日の例会終了後に理事会を開催しますので役員、理事の皆様はご出席願います。

粘り強いサーベイランスがポリオ根絶に向けた前進の鍵

文：Diana Schoberg

アフリカの一部の国は、ポリオ発生のリスクが高いと考えられています。
しかし、マラウイでは何年もの間、ポリオの症例が1件もありませんでした。
この国には公衆衛生の充実したインフラがあり、予防接種率も良好です。
ポリオによるまひを発症した最後の子どもが確認されたのは1992年のことで、それはアフリカ全体でのポリオフリーが認定される数十年も前のことでした。
世界保健機関（WHO）のアフリカ地域ポリオ根絶プログラムのコーディネーターを務めるジャマール・アーメドさんは、「マラウイには、ポリオを知らずに生まれ育った子どもが大勢いる」と話します。
それだけに、2022年2月にマラウイの子どもが野生型ポリオの陽性反応を示したときは驚いたとアーメドさんは振り返ります。
数カ月後、ジャネル・ルースさんが米国ニューヨーク州のポリオ検査機関Wadsworth Centerのキルスティン・セント・ジョージさんからのメールを見たときも、同じように驚きとなりました。
マンハッタンから約50km北にあるロックランド郡に住むワクチン未接種の男性のポリオ感染が確認されたのです。「衝撃だった」と、米国疾病対策センター（CDC）のウイルス性疾患部門で医務官を務めるルースさんは話します。
「米国でまひ性ポリオの症例が出るとは思ってもみませんでした」
では、長い間ポリオがないと考えられていたこれらの国で、どのようにしてポリオが発見されたのでしょうか。
また、感染が拡大しなかったことはどのように確認されたのでしょうか。
このような疾病を検知する活動は、サーベイランスと呼ばれています。
ロータリーは、過去5年間に7,360万ドルの資金を提供してこの活動を支援してきました。
世界的なポリオ根絶が近づくにつれ、サーベイランスは、ポリオのない世界を実現する上で極めて重要な役割を果たすことになります。